

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	タスクベースの授業を効果的に行うための下地作り : 教科書を活用した授業実践例
Author(s)	瀬戸口, 茂久
Citation	中等教育研究紀要 / 広島大学附属福山中・高等学校, 60 : 196 - 201
Issue Date	2020-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/49296
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049296
Right	
Relation	



タスクベースの授業を効果的に行うための下地作り

— 教科書を活用した授業実践例 —

瀬戸口 茂久

学習指導要領の改定を受け、中学校の教育現場ではこれまで以上に発信力を育成する指導が求められている。有効な指導法の1つにタスクベースの英語指導がある。言語習得の教授法として非常に有効な手段と考えられているが、実践するにあたりいくつかの問題点を抱えている。本稿では問題点の1つであるタスク作成にかかる時間的問題を解決する1つの方法を提案する。

1. はじめに

新学習指導要領（中学）の大きな変更点の1つに「話すこと」に関する記載がある。現行の学習指導要領における「話すこと」に関する項目が、新指導要領においては「話すこと[やり取り]・[発表]」の2つに細分化されている。目標に関しては、現指導要領では「外国語を通じて...聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」（下線部は筆者による）とあるが、新指導要領では、「外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通じて、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を...育成することを旨とする」（下線部は筆者による）との表記に変わっている。このことから学習者の発信力を育成する指導が今まで以上に教育現場に求められていることがうかがえる。

この改訂を受け、現在さまざまな指導方法を取り入れた取り組みが提案されている。その中の1つにタスクを用いた授業実践がある（Task-based Language Teaching [以下 TBLT]）。これは、新指導要領の4技能・5領域に関する各目標（「～できるようにする」という Can-Do を意識した表記）と TBLT の唱える「学習者がどのような行為をできるようにする」といふ（松村，2017, p.17）という基本概念と重なるからであろう。しかし、現在中学校や高等学校において TBLT を実践するにあたり、いくつかの問題が指摘されている。具体的には、①タスクの作成に時間がかかる（横山・大塚，2013；鈴木，2018）、②文法指導はどのように位置づけられるべきか（松村，2017；鈴木，2018）、③評価はどのように行うべきかといった問題などである。それらの問題点の中で、本稿では①のタスクの作成時間に関する問題点について主に扱う。

2. タスクの作成に関わる問題

現場の教員がタスクベースの授業をためらう理由の一つとして、タスクの作成には多大な時間を費やすという

ことがあげられる。その問題を解決する1つの方法として、横山・大塚（2013）や松村（2017）は教科書本文とは独立した活動を、短時間（10～15分）長期にわたり帯活動として継続的に実践する方法を提案している。この教科書とは独立したモジュール型の授業実践は非常に有用な手段であり、その他多くの書籍や研修会等でも提案されている。

一方で教科書本文と直結したタスク活動を求める声もしばしば耳にする。これらの声は限られた時間の中で教科書を進め、また終えなければならないという教育現場の実情からくるものであろう。この問題について金子・松浦（2017）、松村（2017）は教科書の内容を利用し発展させたタスク活動を以下のような枠組みの中でいくつか提案している。

- (1) 単元を導入するにあたり、あるタスクを設定し取り組ませる。
- (2) 取り組んだタスクをよりよく解決するカギを教科書に求めながら本文理解を行う。
- (3) 本文理解で得たカギをもとに(1)で行ったタスクを修正し、産出活動（発表や意見交換）を行う。

このような教科書本文を利用した取り組みは現場の教員の大きな助けとなる。しかし、教科書にはタスク活動に転用しにくい教材もあり、進度を意識しながらすべての単元でタスクを設定し実施することは易しい作業とはいえない。

そこで、本稿では、タスク活動を各学期（本校は3学期制を取っている）1つに絞り、それに向けた準備活動を日々の授業の中に取り入れた授業実践を報告する。タスク活動は教科書の中で設定されているものを利用する。準備活動も教科書本文を用いた活動で、純粋なタスク活動とはいえないまでも、タスクの特性を帯びた活動を意識して構成している。

3. 授業実践

3.1. TLBT におけるタスクの条件

授業実践を報告するにあたり、まず TBLT におけるタスクの条件を記す。そうすることにより、タスク活動および準備活動のどのあたりがタスクの特性を帯びているのかを知ることができる。

Ellis and Shintani (2014)はタスクの条件として以下の4点をあげている。

- | |
|--|
| (1) 活動の主眼は、言語形式ではなく、メッセージのやり取りに置かれていること。 |
| (2) 活動には、情報伝達の必要性、意見を主張する必要性、または伝達内容を推し量る必要性など、なんらかの「ギャップ」が存在すること。 |
| (3) 活動を行う際、学習者は、あらかじめ指定された言語形式ではなく、自身のもつあらゆる（言語的・非言語的）手段を自由に選択しながら活動に取り組むこと。 |
| (4) 活動を行う際は、言語を正しく使用することが目的ではなく、何らかの成果を導き出す手段として言葉を使用すること。 |

Ellis and Shintani (2014, pp.135-136)

3.2. タスク活動に必要な言語スキル

先に学期毎に1つ大きなタスク活動を設定すると述べた。これらのタスクも教科書内の活動を利用して行うが、時間的な余裕があればアレンジしたり、別途オリジナルのタスクを設定したりしてもかまわない。

本校では三省堂の New Crown English Series (以下 NC) を採択している。NC には各学年において以下のような Project というコーナーが設けられている。

	NC 1	NC 2	NC 3
Project 1	自己紹介をしよう	有名人を紹介しよう	先生にインタビューをしよう
Project 2	友達にインタビューをしよう	自分の夢を紹介しよう	日本文化を紹介しよう
Project 3	大切なものを紹介しよう	自分の町を紹介しよう	ディスカッションをしよう

これらの活動は大きく2つに分類できる。1つは他者に自分（または自分に関する）ことについて紹介する活動。もう一つは他者（一人もしくは複数）との対話をおして何かを成し遂げる活動（インタビュー記事・合意形成など）である。これらの活動は先に述べたタスクの条件（1）～（3）の条件を満たしている。また、活動

の目的を、正しい言語使用ではなく「何らかの成果」（質疑応答を含むプレゼンテーション、インタビュー記事の作成、また討論を経た合意形成など）とすることで（4）の条件も満たし、TBLT のタスクとして十分活用できる。ではこのような活動を達成し成果を収めるにはどのような言語的スキルが求められるのだろうか。

タスクの条件（3）より、他者に自分のことを紹介する活動として、非言語的手段である絵・写真・グラフなどを用いて人物や事柄について描写する力が求められる時もあるだろう。このほか、ある事柄についてまとめた内容を相手に伝える力も必要となるであろうし、プレゼンテーションの質疑応答やインタビュー活動では他者とやり取りする力も必要となる。さらにコミュニケーションの破綻（Communication breakdown）が生じた際には、「何らかの成果」を出すためになんとか活動を遂行する戦略的な力も必要となるだろう。それらの力を日々の授業実践で養うことが本実践報告の核である。

以下①「描写する力」、②「まとまりのある内容を伝える力」、③「やり取りする力」、④「コミュニケーションの破綻を切り抜ける力」、最後に⑤「表現力を豊かにする力」を養うための授業実践を報告する。やり取りを含む活動を成し遂げるには「聞く力」、場面によっては「読む力」、「書く力」も必要とされるだろうが本稿では扱わない。

3.3 授業実践例

3.3.1. Picture Description

上記で述べたタスク活動の内、「～を紹介する」活動には挿絵や写真の描写が必要な場面も含まれる。したがって、教科書の各レッスンで使用されている挿絵や写真の描写活動は、タスク活動を完了させるのに必要なスキルを磨く格好の機会となる。絵や写真の描写は本文理解にも大きく関わるので、時間的なロスもほとんどない。筆者はこの活動を主に、各レッスンの導入場面で用いている。生徒に What is this picture about? や What do you see in the picture? などの質問を投げかけながら授業を展開している。

また、何かを「描写する力」は、日常生活の中で起こったことを、場面として切り取り誰かに伝える力と直結している。そこで教科書中の関連する挿絵や写真を複数枚並べ、その場面について深く考えさせることにも使用している。複数の挿絵や写真を提示しながら対話を切り出し、生徒から出てきた答えをもとに、対話を進めてゆく。原則として教科書の流れに沿うように話を展開し本文理解へとつなげる。生徒に身近なトピックやキーワードが出た時は、彼らの身の回りの事柄やそれらに関する意見・感想なども語らせるように配慮し展開している。

教員主導ではあるが、テキストの内容に関連しながら質問し、多少の受け答えの誤りは気にせずすすめることで、授業の中で英語を使うことをより自然な状況にする働きもある。本文理解に必要な新出語句や関連語句もこの場で扱う。

[Oral Introduction]

T: Who are they?

S: Ken and Emma.

T: What do you think they are talking about?

S: They are talking about rakugo.

T: Rakugo? What is rakugo?

S: <生徒の説明> *理解可能であれば「よし」

T: Look. How many tickets does he have?

S: Two tickets.

T: Why does he have two tickets?

S: He wants to go to a rakugo show with Emma.

T: Do you think Emma will go to the show with him?

S: Maybe.

T: Why do you think so?

S: Because she is interested in Japanese culture.

T: I see. Now, you are Ken and you would like to go to a rakugo show with Emma.

How would you ask her out? What would you say to her? And... I am Emma.

S:<生徒の発言> *教員は相づちや質疑応答

(New Crown 3, Lesson 3)



(General → Specific) を考えさせたり、生徒に共通する言語的なエラーをとりあげ修正したりする（フォーカス・オン・フォーム）ことで、TBLTを通した言語習得が促進される。

[本文]

Ken: How did you spend your time in Australia?

Emma: I had fun. I visited Sydney with my aunt. I'll show you some pictures.

Ken: Oh? You are wearing a coat and gloves. Was it cold?

Emma: Yes. It was the middle of winter there.

Ken: That's amazing.

(New Crown 2, Lesson 5)



[授業の展開例]

1. Oral Introduction
2. Comprehension (1) *本文の内容理解 (Q&A)
3. Comprehension (2) *文法・語法の説明
4. Text Reading
 - 1) Repeating
 - 2) Read and Look up
 - 3) Shadowing *ここでテキストを閉じる
5. Story Retelling (Reporting)
 - 1) Individual Work
 - a) Have students stand up and fill in the blanks (1),(2) and (3) orally. (1 minute)
 - 2) Pair Work (Performance ①)
 - a) Have students make pairs and do "Janken" with their partners.
 - b) Winners play Ken's part and losers play his mother's part.
 - c) When they've finished, switch the roles.
 - 3) Pair Work (Performance ②)
 - a) Have students repeat 2) with different partners.
 - 4) Demonstration by representatives and teacher's feedback

3.3.2. Story Retelling (Reporting)

各レッスンの内容理解のあと音読活動を経て、該当のパートで学んだ語句・表現の定着ねらい、また「まとまりのある英文」を述べる力を養う活動の1つとしてStory Retellingを行っている。ただし、タスクの条件(3)より、新出文法事項を指定して用いさせることは原則として行わない。

話者がまとまりのある内容を語るができるようになると、それは聞き手にとって聞き返すことができる材料が生まれることにつながり、対話を継続させることが容易となる。不必要なターンテイキング (How about you?や By the way の乱用) を避けることができ、より自然な対話を生み出すことにつながる。日ごろから授業の最後に本文の内容をまとめて話す訓練を積んでおくと、モノローグの質だけでなく、ダイアログの質も上がってくる。ただし、活動の最後には指導者からのフィードバックが欠かせない。まとまりのある英文の特徴

[Story Retelling]

*You are Ken. You've just come back from school and are talking with your mother.

Mother: How was your day Ken?

Ken: Pretty good. (1) _____

Mother: What? Tell me more about it.

Ken:(2) _____

Mother: No, I didn't. (3) _____

この例の場合、What? と母親に思わせる内容が下線部(1)にくる (e.g. Today, I learned it's winter in August in Australia.)。

下線部(2)にはその経緯について順を追って説明する内容 (この部分が Story Retelling となる)。また、No, I didn't. という答えにつながる英文で締めくくる必要がある。(e.g. I talked with Emma today. She went back to Australia during the summer vacation. She showed me some pictures and she was wearing a coat and gloves. She said it was the middle of winter in Sydney in August. I was very surprised. Did you know that?) この時に言語形式は指定しない (タスクの条件(3))。下線部(3)は母親のコメント(文脈に合えばどのようなものでもよい)。(e.g. Does it snow in August in Sydney? If it does, I want to ski there.)

フォードバックでは、(2)の Story Retelling の活動 (話の展開・必要な内容・発音など) だけではなく、(1)と(3)の発言が前後の流れを押さえられたものとなっているかということも大切なポイントとなる。

この活動は筆記形式でも行える。筆記形式にすると、言語的なエラーが可視化するので正確性を身につけさせるのに効果的である。

3.2.4 なんちゃってダイアログ (Quasi Dialog)

筆者は先に示した「～を紹介する」という類いの活動には必ず質疑応答を組み込んでいる。「やり取り」をうまく達成させるには「やり取り」の練習が不可欠である。そこで、「やり取り」の練習の場として、教科書の USE・Read というセクションを利用し練習を行っている。このセクションは分量が多いので、以下に示す展開例の枠で収まるようなまとまりに区切り取り組んでいる。

[本文 : Ways to Keep in Touch]

... 省略

(New Crown 2, Lesson 7)

[授業の展開例]

*前時までには本文の内容理解は終えている。

- 1) Repeating (発音の確認)
- 2) Translation (1) (日本語 ⇒ 英語)
*個人で1分間 (対訳プリント利用)
- 3) Translation (2) (日本語 ⇒ 英語)
*ペアで1分間 (対訳プリント利用)
- 4) Q&A (テキストは閉じる)
*異なる質問用紙を各ペアに配布 (下記参照)
①～③は本文の内容に関する質問。
④は相手の意見を聞く Open Question

[Card A] ~ Student A

- ① Why do some students choose letters?
*「+1」がない場合、“「+1」 please!”と言う。
*「+1」はテキストと同じでなくてもよい。
*返答に対しさらに質問をしてもよい。
- ② 相手からの質問です。
*「+1」を意識して答えること。
- ③ Which do you like better, letters or phone calls? (Why?)
*「+1」がない場合、“Tell me more about it.”。
*返答に対しさらに質問してもよい。
- ④ 相手からの質問です。
*「+1」を意識して答えること。

[Card B] ~ Student B

- ① 相手からの質問です。
*「+1」を意識して答えること。
- ② Why do some students like telephone better than other ways?
*「+1」がない場合、“「+1」 please!”。
*「+1」はテキストと同じでなくてもよい。
*返答に対しさらに質問をしてもよい。
- ③ 相手からの質問です。
*「+1」を意識して答えること。
- ④ Did you write a letter or a post card this year?
*Yes ⇒ Do you often write letters?
⇒ Yes./No.
⇒ “Tell me more about it.”
*No ⇒ How do you keep in touch with people?
⇒ 何らかの返答
⇒ “Tell me more about it.”

3.3.4. 日本文化の説明 (Describe Japanese Culture)

モノログにせよ、ダイアログにせよ、ある言葉を的確に言い表せないときがある。例えば ALT とのインタビューの中「節分」の話題になったとする。ALT から What is “Setsubun (節分)”と聞かれた場合、タスクをやり遂げるためには、沈黙を最小限に抑えなんとか言葉

をつなげていく必要がある。そのような時に備え Team Teaching の授業(本校では教科書を用いた授業とは別に 1 時間設けている)の帯活動の一つとして ALT に日本文化を説明する活動を取り入れている。素材となる日本文化は基本的にどのようなものでも構わないが、教科書で紹介してある素材からはじめると、表現のヒントもあるので取り組みやすい。

説明の必然性を持たせるために、はじめの 2 時間程度は ALT と JTE とのやり取りの中で、ある日本文化を説明しなければいけない場面をあえて設け、それを受け生徒に英語での説明を考えてもらうという展開とした。慣れてきたら「Describe Japanese Culture」というコーナーを帯活動として設け、ゲーム的要素をとりいれて行っている。

[授業の展開例]

- 1) Have students do “*Janken*”.
*勝ちは後ろを向き、JLT はお題を提示。
- 2) Have losers describe today’s topic. (1 minute)
- 3) Ask winners how their partners describe the topic.
*説明は意味が通ればよしとする。キーワードを板書。2～3 名繰り返す、お題の説明として(ある程度)十分な要件が出そろったら終了。
- 4) Have students make the definition of today’s topic with the key words.
*キーワードが足りない場合は「5 W 1 H」の疑問文(下記参照)に答える形で定義文の要素をつくるように指導。
 - What is it? ...
It’s a kind of festival.
It’s a traditional Japanese practice.
 - What does “Setsubun” mean? ...
It means the end of winter and the beginning of spring.
 - When do we have that day? ...
In February. / On February 3rd.
 - What do you do on that day? ...
We throw beans and say, “Demons out, Fortune in!”
 - Why do we have the festival? ... To celebrate the beginning of spring.
- 5) 活動に慣れてきたらフィードバック(フォーカス・オン・フォームを含む)を行う
 - (a) 出題者は 3 文以上のまとまった英文を意識

する。

- (b) 出題者は General ⇒ Specific という英文の構造を意識する。
- (c) 解答者は合づちをしながら聞き、出題者が詰まったらお題を引き出す質問をする。

3.3.5 表現力を高める活動 (Make the passage more colorful)

以下の英文は Project の一つである「大切なものを紹介しよう」を Show & Tell 形式で行った際の初校原稿である。

Hello, everyone. This is a baseball. This is my treasure. This is very important. In May, I went to see a baseball game to Mazda Zoom-Zoom Stadium with my family. I got this baseball before the game started. The Carp won the game, too. I had a very good time. Thank you for listening. Do you have any questions? (59 words)

全体として内容は伝わるが、形容詞を含む一文とその英文が具体的に指す事柄とのつながりが薄い、もしくはほとんどみられない。この場合なぜそのボールが “I” にとって “important” なのか、“have a good time” とあるが、それが話の主題である“(this) baseball” とどのようにつながっているのかが明確に表現されていない。他にも “I was excited.”, “I was very happy.”, “I was very tired.” などの形容詞を含む表現が本文の内容とうまくつながっていない英文が散見された。

そこで、前述のような問題点を伝え「下線部の内容がより伝わるように下線部を加筆しなさい」という指示を与え、再提出を求めたところ以下のように英文が大きく変化した生徒が数名みられた。教員による訂正済みの英文だが、内容はほぼそのままである。

Hello, everyone. This is my treasure. This is very important to me. Why? It has a name on it: Mr.○ (選手の名前). I am a big fan of him. I got this baseball when I went to see a baseball game with my family. That was my first time. I was very excited. Before the game started, some players came into the field and started to throw baseballs to the fans. Mr.○ was one of them. His ball fell onto the area near my seat. I run to it and got it. I got more excited. Also, the Carp won the game that day. I had a very good time.

Thank you for listening. Do you have any questions? (120 words)

下線部の内容が具体化され非常にわかりやすい英文となった。そこで以下のように教科書本文を利用し授業に組み込んだ。

[本文]

Emma: The day-at-work program is coming next month.

Ken: Right. I want to go to a nursing home.

Emma: But you want to be an engineer, don't you?

Ken: Yes. Nursing homes use robots these days.

Emma: It sounds perfect for you.

(New Crown 2, Lesson 6)

[授業展開例]

1~4. ~ 3.3.2 [Story Retelling]と同じ

5. Make the passage more colorful

Question :

次の英文は Emma のブログの一部です。下線部の内容がより伝わるように加筆しなさい。本文の内容に必ずしも沿う必要はありませんが、読む人が納得できるような英文を心がけること。

*Today Ken and I talked about the day-at-work program. He said he wanted to go to a nursing home. It sounded perfect for him.

[解答例]

Today Ken and I talked about the day-at-work program on our way home. It's coming next month. I want to work a Japanese restaurant. This is because I am interested in Japanese food. Ken said he wanted to go to a nursing home. I asked him the reason, because I knew his dream was an engineer. He explained that nursing homes use robots these days. He said he wanted to see these robots there. It sounded perfect for him. I hope we each can find a good place to work at.

このように Question を設定した活動として行くと、多くの数の生徒が表現を工夫しながら具体性の伴う英文を書くことができる。しかしながら、現在、即興的な口頭発表はもちろんのこと、エッセイなどの筆記活動においてもその効果は数える程の生徒の発言にしか反映され

ていない。今後さらなる変化を信じて継続的に活動を続ける必要がある。

4. おわりに

以上、学期の最後に行われるタスクを用いた活動に向けて日頃の授業の中で教科書を進めながらできる活動をいくつか紹介した。しかし、本稿冒頭でも述べたように、タスクベースの授業には文法の扱いや評価の仕方についてまだまだ議論を重ねていかなければいけない。

現在新出文法については本文理解の段階で導入を行い、簡単なパターンプラクティスを行いながら、ある程度進んだところで文法問題集を家庭学習の課題として与え提出させている。その後提出された課題に目を通し、多くの間違いがみられる箇所を授業で扱ったり、タスクの中で生徒から誤った発言がみられたときにフィードバックを与えたりしている。また、純粋なタスクベースの活動とはならないが、文法事項（関係代名詞・不定詞等）を指定して上記の活動にとり組ませることもある。今後はこのあたりを整理しながら、体系立てて指導していく必要がある。

評価に関してもパフォーマンステストで行うもの、定期テストに組み込めるものなど整理しなければならない。現在は Retelling やインタビューなどはパフォーマンステストとして実施している。また日本文化を説明する活動は定期テストに組み入れている。

最後に、学習者がこれらの活動を通してどの程度英語の力を伸ばしているのかについて、データを収集し客観的な資料として提示することも必要である。そうすることでタスクベースの英語学習に効果があることが認められるとそこからさらなる展開が望めるだろう。

参考文献

- ・金子朝子・松浦伸和（2017）『平成 29 年版 中学校新学習指導要領の展開 外国語編』明治図書
- ・鈴木渉（編）（2017）『実践例で学ぶ 第二言語習得研究に基づく英語指導』大修館書店
- ・松村昌紀（編）（2017）『タスク・ベースの英語指導—TBLT の理解と実践』大修館書店
- ・文部科学省（2017）『中学校学習指導要領解説 外国語編』
- ・横山 吉樹・大塚 謙二（2013）『英語教師のためのフォーカス・オン・フォーム入門 成功するタスク&帯活動アイデア』明治図書
- ・Ellis, Rod., and Shintani, N. (2013) *Exploring Language Pedagogy through Second Language Acquisition Research*. Routledge